

尾崎一雄全集

第十五卷



筑摩書房

尾崎一雄全集第十五卷

昭和六十一年一月三十日初版第一刷發行

著 者 尾 崎 一 雄

發行者 布川角左衛門

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番號 一〇一—九一

電話 東京(291)七六五一(營業)

東京(294)六七一一(編集)

振替 東京 六一四 一二三

印刷 株式會社 精興社

製本 株式會社 鈴木製本所

落丁・亂丁本はお取替致します

目次

續あの日この日

はしがき

一—三

療養生活に入る 空襲下見舞に來た尾崎士郎、車
谷弘

四—六

上野櫻木町時代の回想 徳田秋聲・一穂父子の砂
子屋書房來訪

七—八

徳田秋聲作「縮圖」の女主人公 丹羽文雄栃木縣
へ疎開

九—十

空襲下の雛祭り 三月九日の東京下町大空襲、山
下一家の悲運、松枝の強運

十一—十三

NHKテレビ特集「東京大空襲」

十四—十五

グラマン機に狙はれる下曾我

十六—十七

圓地與四松より、日本のポツダム宣言受諾を知ら

五

七

一七

三

四

六

五

一〇三

される 病を押して上京

十八——十九……………二六

八月十五日

二十——二十一……………二七

浅見淵との交換書信 戦ひに敗れし國もあづさ弓
春としなれば八千草の萌ゆ

二十二——二十三……………二七

アルコール派、アンチアルコール派の辯 坂口安
吾の活躍 知友續々戦場から還る

二十四——二十五……………二五

「うなぎ屋の話」を読んで「千萬喜」の客となつ
た正宗白鳥、宇野浩二 諸雑誌の復刊、創刊 日
本の愚かさ、ソ連の悪賢こさ

二十六——二十七……………二六

舟橋聖一とのやり合ひ 第十七回メーデー 米ヨ
コセデモ 我が家の買出し部隊

二十八——二十九……………一九五

志賀直哉より唐詩「送王永」の染筆を贈られて感
激、闘病の意力昂まる

三十——三十一……………二〇六

志賀直哉熱海稻村時代の習字熱。その書

三十二——三十三……………三八

『群像』初代編輯長高橋清次、初の擔當記者有木勉 太宰治・太田靜子突然の來訪。「尾崎は長いことない」と治が靜子に言つた

三十四——三十五……………三六

母タイ、七十歳にて急死。村のある人は一雄が死んだと早合點した 尾崎士郎の持ち雜誌『風報』創刊の議。國府津つたや旅館にて座談會 廣津和郎來訪

三十六——三十七……………三四

湯淺芳子來訪、一泊 丹羽文雄、井上友一郎來訪 『風報』三號雜誌に終る

三十八——三十九……………二六

「虫のいろいろ」の成立、わが作品の樂屋裏 檀一雄來訪一泊、半徹夜で話す 太田靜子女兒を生む

四十——四十一……………二八〇

尾崎士郎公職追放令にひつかかる 「オトコウマレタオザキシロウ」「トウカイニオノコウマレテサツキバレカズオ」

四十二——四十三……………二九一

太宰治死す 「文學時感」にて諸作家を論評 二・一ゼネスト禁止の際の伊井彌四郎のラジオ放送

四十四——四十五……………三八

「オマヘヲチラト見タノガ不幸ノハジメ」尾崎一

雄様 太宰治

四十六——四十七……………三三

井伏鱒二戦後初の來訪「カストリを飲まざるの
辯」世間智皆無の太田靜子

四十八……………三九

太田靜子の世俗智皆無につけ込む泡沫出版社そ
のいざこざに巻き込まれた日々 頼尊清隆との交
遊

四十九——五十……………三五

最も古き讀者加藤澄藏、突然來訪、見舞金を置い
て住所も告げず逃げ去る

五十一——五十三……………三七

正岡子規、平林たい子の闘病振りに學ぶ わが病
何ほどのことかあらん

五十四——五十五……………三九

中野重治、上林曉の來訪。宗我神社の四本の巨松
を見せて大自慢「次の絶筆は尾崎一雄だ」と『群
像』編集部に云つた批評家は誰か？

五十六——五十七……………四〇

『群像』の「絶筆狙ひ」見事に失敗。但し狙はれ

た本人は知らぬが佛 江藤淳の天真爛漫な笑顔

五十八―五十九……………
四一六

生存五ヶ年計畫達成に近し

六十一―六十二……………
四三〇

戦後初めての志賀直哉訪問、作品を褒められ、松
枝を褒めらる

あとがき……………
四四四

年 譜……………
四四五

後 記……………
四七九

尾崎一雄全集
第十五卷

續あの日この日

はしがき

本誌に「あの日この日」といふ文學的自傳風のものゝ連載を始めたのは、昭和四十五年の新年號からで、あと滿四年間、一と月の休載もなくつづけて、總枚數二千百枚になつた。それから九ヶ月ぐらゐかけて大巾に手を加へ、また二十七頁に及ぶ人名索引を附したりして、A5判上下二冊總頁數九百十の本にしたのは、五十年一月下旬だつた。

幸にも、新聞雜誌の書評はすべて好意的であつた。おかげで、各卷二千四百圓といふ高い本なのに賣れ行きは好く、十月には再版の運びとなつた。

ところが思ひもかけず、この本が五十年度の第二十八回野間文藝賞に選ばれた。すでに三十七年、第十五回の同賞を貰つてゐる私にとつて、前例の無い再度受賞が、寢耳に水だつたのは當り前である。それだけに嬉しさもまた一入だつた。

受賞は當然賣れ行きにひびいて、三版が出、やがて四版といふことになつた。有難いことである。

その好評に乗つて續きを書く氣になつたといふのではない。實は、「あの日この日」を『群像』に連載中の擔當記者であり、單行本發行時には出版擔當員となつた渡邊勝夫から、續きを今度は書き降ろし

で出さうではないか、との申入れを受けたのである。それは本が出た頃のことだから、約三年前の話だ。私は、よからう、と答へた。無責任にではなく、本當にそのつもりになつて、約束をしたのだ。

ところが半年一年と経つうち、書き降ろしといふのは、私の性に合はぬらしいことが判つてきた。私は昔から今に至るまで、原稿のストックといふのを持つたためしがない。注文が澤山あつて書けば右から左へ、といふのではなく、閑なくせに書き溜めができないのだ。甲斐性なし、といふべきだらう。

今年（五十二年）の春頃、渡邊君に、約束變更の申入れをした。七十を過ぎての四年間、ときには體調を損ねて休みたいこともあつたのにとにかく無休でやり通した、締切りといふ奴の顔にも飽き飽きしたので、書き降ろしでやりますなどと言つたが、僕はやつぱり締切りがないと書けないらしい、だからまた連載といふことにしたい――。

『群像』編集部も渡邊君も異議なしといふことで、今月から始めることになつた。期間は一年から、長くて一年半ぐらゐの豫定である。「あの日この日」は、長くて一年半ぐらゐと思つてゐたのが四年になつた。今度はその轍を踏まぬやうにする。

戦後の二十一年春から二十四年末まで、私は珍らしく、メモを記しつづけた。來客、來信、發信をつけるだけの簡單なものだが、回想の確かな礎石はあるわけだから、飛んでもない間違ひを犯すことは無いだらう。

一 療養生活に入る 空襲下見舞に來た尾崎士郎、車谷弘

昭和十六年か十七年だったと思ふが、母を東京へ呼んだことがある。上野櫻木町にゐた私は、郷里下曾我の家に獨居する母のことが氣がかりだった。當時六十五か六だった母は、特に病身といふのではなかつたが、いろいろと苦勞が重なつたせゐだらう、齡の割には老い込んでゐた。

母の健康に關して私の氣にした點は、その兩親の死に方から考へて、母は不意にいつて了ふのではあるまいか、といふことだった。母の父、つまり私の外祖父は、「あの日この日」の初めの方で書いた通り、大正十二年の關東大震災の十日ほど前、私と碁を打つてゐる最中腦溢血を起して意識を失ひ、九時間後に死んだ。外祖母の方はそれより早く明治末期に健忘症といふ病氣にかかり、それでも身體そのものはよく動いて、寢込むなどといふことはなかつたが、大正二年に五十いくつでぽっくりいつてしまつた。やはり腦溢血らしかつた。

兩親がさういふふうだったから、母が動き廻りながらも、いつ仆れるか判らぬ、といふのが私の心配の種だった。さういふ懼れのある母を、隣り近所の離れた田舎の家に獨り置いていいものだらうか。

とは言へ、私の方が田舎へ退込んで母と合流するわけにはいかない。志賀直哉とか谷崎潤一郎とかの大家ならばどこに居てもいいだらうが、私などがその眞似をしたら職業が成り立たないだらう。結局は母を東京へ呼び寄せるほかないのだ。

その豫行演習として、一と月ばかり東京住ひをさせて見ることにした。

だがそれは失敗に終つた。僅か五、六坪の内庭に數本の植木があるだけの横丁の小家では、野菜作りはもとより、草花の世話や草除りさへ出来ない。私の借家は、たしか須藤しげるといふ兒童畫家が居た家で、上野の音樂學校と美術學校の間の道を谷中方面へ抜けると、谷中通へ出る一つ手前の横丁にあつた。公園が近いのだから、孫共を連れて散歩に行つたら、とすすめても、母は人出を怖がつて外へ出ようとしなない。茶室造りの四疊半に籠つて、何かのつくろひものでもするほかは、身の動かしやうが無いのだつた。

「葱はどうなつてゐるだらうね。白菜に蟲がたかつて居やしないか」心配さうにそんなことばかり言つてゐたが、一週間目に、下曾我へ歸る、と言ひ出して、頑としてきかないのであつた。ノイローゼ氣味に見えた。

翌日、私は母を下曾我へ連れ歸つた。すると實に現金に、母は生色をとり戻した。

「東京みたいなどころには、わたしは住めないよ。土いぢりが出来ない上に、うつかり外へも出られやしない。わたしは病氣になつてしまふよ。さアこれから野菜物の手入れをして、また小荷物で送つてやるからね」

「お願ひします」

「東京は野菜物が高いね。松枝の買つて來たものを見て驚いたよ。今に柿や蜜柑が出来るから、どつきり送つてやるよ」

「有難いけど、とにかく身體に氣をつけて下さい。何しろ近所が遠いから」

「ここに居ればわたしは元氣だよ。あんなせせつこましい所に居るお前たちの方が心配でならないよ。」